



全苗連だより

Vol. 19 (2月号)

平成28年2月16日

発行：全国山林種苗協同組合連合会

Tel.03-3262-3071 Fax.03-3262-3074

栃木県はスギ苗木を全量コンテナ苗に切り替える方針です。

少花粉スギが主体、平成29年度には90万本を見込む。

栃木県は平成29年度までの3か年で、新規植林用のスギ苗木の全量をコンテナ苗に切り替える方針です。林野庁は、育苗作業の効率化・植栽時期の拡大・造林作業の軽減化やコストダウンを図るためにコンテナ苗の普及推進に取り組んでいますが、県単位で全面的に導入するのは全国で初となります。

栃木県では、人工林の8割が伐期に達しており、人工林を更新して次代の森林を育てるために皆伐施策を促進する施策を取っており、スギの新植面積は平成27年度の155haから平成28年度は225ha、平成29年度は240haへと増大し、平成29年度には60万本のスギ苗木が必要となる見通しであります。これに加えて、平成26年2月の雪害で約1,500haの森林被害が発生し、同年4月には約70haに及ぶ山火事が発生し、植え替えを必要とする森林が370haと、毎年度30万本のスギ苗木が必要となり、通常分プラス復旧分で平成29年度には計90万本の苗木を確保しなければなりません。

一方、県内の苗木生産者は、平成10年度の74人が平成25年度には33人に減少し、苗木生産量も135万本から48万本に落ち込んでおりました。

栃木県は、苗木生産量を反転上昇させるため、皆伐・再造林の推進と併せてコンテナ苗へのシフトを進めていますが、被災森林の復旧という緊急需要に対応するため、コンテナ苗への切り替えを加速化することになりました。

増産するコンテナ苗は少花粉スギ品種を主体として、1年生の幼苗をコンテナ容器に移植することで出荷ペースを早めることができます。また、栃木県は苗木生産者の初期投資を軽減するため、「少花粉スギコンテナ苗生産支援事業」により、コンテナトレイや培土などの導入経費に対して助成しています。

さらに、生産者（栃木県山林種苗緑化樹協同組合）と需要者（栃木県森林組合連合会）との情報交換を活発化させ、説明会及び現地研修会の開催や植付マニュアルの配布などを行っています。

コンテナ苗への全量切り替えとなりますと、苗木生産者全員の総意が必要でありますし、新たな設備投資とリスクを抱える覚悟が必要です。それでも実現できたのは、栃木県山林種苗緑化樹協同組合の団結力、組合幹部の指導力はもとより、自分たちがやらないと山は守れないという使命感と、新たなビジネスチャンスをつかみたいという期待感がありました。また、種苗組合では、県の方針として切り替えが決まる以前からコンテナ苗の生産に着手し、技術面でのノウハウを蓄積してきたことや、県指導の基、事前に少花粉スギ採種園等を整備し、種子の採取を開始したことなど、先を見据えた地道な対応が功を奏したものと思われま。

「技術情報」

平成27年度 林木育種成果発表会が開催されました。

テーマは、最先端へのアクション！進化する林木育種！～次世代品種が変える、日本の森林・林業～

国立研究開発法人森林総合研究所**林木育種センター**主催による『平成27年度 林木育種成果発表会』が2月5日東京新木場の木材会館7階大ホールにおいて、全国から種苗関係者、都道府県、研究機関等の担当者など約140名が参加して開催されました。

冒頭、挨拶に立った渡邊聡林木育種センター所長は、「品種改良は大きく進展しているが、開発された品種が苗木として供給され、林業の振興に役立つようにしなければならなければならない。」と挨拶しました。

発表内容は、次のとおりです。

『特別講演』 エリートツリーと木の文化 宇都宮大学 飯塚和也教授

『特別報告』 優良な抵抗性クロマツ種子の生産性の飛躍的な向上 ～東日本大震災復興としての取組～
青森県産業技術センター林業研究所 田中功二森林環境部長

『成果発表(林木育種センター・育種場)』

- ① 平成27年度開発品種の開発 育種第1課 田村明育種調査役
(61の優良品種を開発、うち9品種の花粉症対策品種、マツノザイセンチュウ抵抗性11品種など)
- ② スギにおけるゲノム情報を活用した高速育種技術基盤の確立 育種第1課 平岡裕一郎基盤技術研究室長
(スギゲノム基盤の整備や遺伝子マーカーによって形質を予測する技術の開発)
- ③ 早生樹種コウヨウザンの品種改良に向けて 探索収集課 磯田圭哉分類同定研究室長
(初期成長が早く、ヤング率も良いコウヨウザンの成長、材質特性を調査、製材品の性能評価)
- ④ 環太平洋とつながる林木育種協力 海外協力課 松下通也研究員
(防風林等に植栽されているテリハボクについて、優良品種開発に向け、台湾林業試験所等と国際共同研究)
- ⑤ 薬用系機能性樹木の生産効率化手法の開発に向けた取組 森林バイオマス研究センター 谷口亨研究室長
(カギカズラ、キハダ、ワダツミノキについて、薬用成分含有率の高い個体の選抜、クローン増殖法開発など)
- ⑥ 木質バイオマス生産量の大きいヤナギの開発に向けた取組 北海道育種場 矢野慶介主任研究員
(北海道でバイオマス生産量の大きいヤナギの品種開発に向けた取り組み)
- ⑦ ヒノキエリートツリーのさし木品種開発について 関西育種場 久保田正裕育種課長
(さし木品種の要望があるヒノキについて、さし木発根性に優れ、初期成長が良好なクローン選抜の取組)

『今後の林木育種の展望について』 林木育種センター各部長等

全苗連・苗組の行事予定

- 2月18日 千葉県苗組・コンテナ播種技術講習会(千葉県農林総合研究センター森林研究所)
- 2月19日 日本林業経営者協会講演会(東京・山会堂ビル)
- 2月24日 「全苗連生産者の集い」第2回実行委員会(静岡県庁)
- 5月12日 (会場仮予約) 全苗連理事会
- 5月27日 (会場仮予約) 全苗連平成28年度通常総会

